

西豪州ブルーム地域の接触言語研究 —語彙と日本語の影響の分析—

西沢 雅代

1. はじめに

明治時代中期頃から、西豪州のブルーム(Broome)地域で真珠貝採取に従事したマレー人、日本人、中国人、アボリジニなどの人々の間でピジンが発生した。このピジンに関して、Hosokawa(1987)は、ブルーム地域の言語接触の歴史を明らかにするために1986年からフィールドワークを行った。この調査により、ブルーム地域で発生したピジンの構成要素や日本語が関連していることなどが明らかになった。西豪州のブルーム地域で発生したピジンは Broome Pearl Lugging Pidgin(以下、PLP とする)と呼ばれている。McGregor (1988)は、PLP の単語リストなどは確認できていないし、Hosokawa(1987)以外に文法的な解説を行っているものはほとんど見当たらないと述べている。このように、PLP に関する資料は大変少ない。そのため、Hosokawa(1987)に記載されている語彙や文法説明は PLP 研究の資料としても、非常に貴重である。本稿では Hosokawa(1987)に記載されている PLP の語彙を収集し、起源語ごとに語彙リストの作成を行う。また、PLP にはどのような特徴があるかを PLP と同様に起点言語の一つに日本語がある横浜ピジンと比較しながら分析を行う。そして、PLP を構成する起点言語の一つである日本語が PLP にどのような影響を与えているのかについても考察を行う。本稿の目的は、今後の PLP 研究の資料となるように、Hosokawa(1987)から PLP の語彙リストの作成と分析を行い、さらに日本語の影響を考察することである。

本稿の目的と先行研究を踏まえたリサーチクエスションは以下の2点である。

- 1) 日本語を起点言語にもつ PLP と横浜ピジンでは相違点があるか。
- 2) PLP にどのような日本語の影響が見られるか。

2. 先行研究

Hosokawa(1987)は、真珠貝採取に従事する日本人を含むアジア人とアボリジニが労働した採貝船での共通語は、基本的にマレー語で、日本語の助詞や単語、アボリジナルピジン英語の単語が多数含まれていると述べている。また、13例文を用いて、PLP の特徴についての解説もしている。

そして、以下の理由により PLP が典型的なピジンであったことが示唆されると述べている。

- i PLP の使用は真珠貝採取の労働環境に限られ、1960年代後半以降、真珠産業における多民族労働力の衰退に伴い、使われなくなった。
- ii マレー語起源の語は、方言とは考えにくいほど変化している。

- iii マレー語母語話者も、他のアジア人やアボリジニの労働仲間と話すときは PLP の形を使う傾向があった。
- iv PLP はマレー人以外の人々(日本人とアボリジニ、日本人と中国人など)のコミュニケーション媒体としても使用されていた。

これらを踏まえて、Hosokawa(1987)に記載されている PLP の語彙リストの作成と分析、そして日本語の影響をまとめ、PLP の特徴についても考察を行う。

3. 歴史的背景

本節では、日本人がどのような経緯で西豪州のブルームに渡航し、PLP が発生することになったのかを概観する。和歌山県の本州最南端にある串本町の在住者によると、現在でも串本町及びその近郊ではオーストラリアを豪州と呼んでいるとのことなので、それに倣い本稿でもオーストラリアを豪州と記述する。

日本における海外への移民は明治初期から南北両アメリカ大陸、ハワイ、カナダ、豪州などへ和歌山県、広島県などの地方都市から渡航したことに始まる。当時、渡航先の国々は産業基盤拡充のため、多くの労働者を必要としていた。そして、当時の日本が働き場所に乏しく、一般的に生活が貧しかったことから海外への進出は全国的な風潮にはなっていた。このように渡航先と渡航者の利害が合致したことで日本から多くの人々が海外に移民として渡ったのである。当時、様々な産業が発達し、開拓途上にあった豪州でも、労働力不足からいろいろな移民の募集を始めたものと思われる(太地町史監修委員会 1979:777)。全国的にも屈指の移民県である和歌山県では、南端部沿岸の串本、潮岬、大島村、太地町などを中心に、豪州への採貝移民が多く見られた(鈴木 2008:15)。豪州で採貝業に従事していたのは日本人ばかりでなく、マニラ、マレーなどアジアからの移民もあったが、日本人の潜水技術は非常に優れていた(太地町史監修委員会 1979:778)。

豪州西部のブルーム(Broome)や北部のトレス海峡に位置する木曜島では、明治維新後から数多くの日本人が真珠貝採取業に従事した。トレス海峡に端を発した採貝業は、やがて北・西豪州各地に発展して行き、1890 年ごろにはブルームは西豪州最大の採貝基地となっていた。1900 年には和歌山県人を中心とした 360 人の日本人が採貝業に従事していたようである(串本町史編さん委員会 1995:645,656)。当時、真珠貝は高級な貝ボタンや貝細工の材料としてヨーロッパに輸出され、大きな利益を得ていたことから採貝業が盛んになったと言われている(串本町史編さん委員会 1995:640)。1860 年代後半にオーストラリア海域での真珠貝の商業的採取が始まった頃から、1960 年代初頭にプラスチックボタンが登場した頃まで、真珠貝採取ダイバーとその周辺産業は豪州経済の重要な要素だった(Sissons 1979:9)。

Hosokawa(1987)によると、ブルームで採貝業に従事していたのは日本人、マレー人、中国人、フィリピン人、少数の韓国人、そして地元のアボリジニであった。このよう

な日本人を含むアジア人やアボリジニが主に採貝船と言う環境で労働する中で言語接触が起こり、コミュニケーションのために PLP が形成されていったのである。

4. 語彙の収集と分析

本節では Hosokawa(1987)にある PLP の語彙 (異なり数) を収集し、起源語ごとに語彙リストの作成と分析を行う。Hosokawa(1987)は、13 例文中の PLP の語彙ごとに M(マレー語)、J(日本語)、PE(アボリジナルピジン英語)のように起源語を示している。そして、例文以外でもマレー語由来、日本語由来、アボリジナルピジン英語由来に分けて PLP の語彙を紹介している。本稿における起源語の分類は、このような Hosokawa(1987) の記述に従って行う。

4.1 語彙リストの作成

Hosokawa(1987)の本文中にある PLP の語彙を収集した結果は、表 1 から表 5 の通りである。収集した語彙は全 94 語、起源語別では、マレー語起源が 46 語、アボリジナルピジン英語起源が 33 語、日本語起源が 12 語、マレー語と日本語の混合形が 3 語である。

4.2 マレー語起源

マレー語起源の語彙は 46 語だが、これには、マレー語(M)の方言であるクパン・マレー語(Kupang Malay = KM)起源、クパン・マレー語及びインドネシア語(Bahasa Indonesia = BI)起源、戦後に使用されたマレー語が含まれている。本稿で収集したマレー語起源の語彙は 46 語である。しかし、Hosokawa(1987)ではマレー語起源の一部を記載すると断りを述べているので、実際にはもっと多くのマレー語起源の語彙が PLP には入っていたと考えて良いであろう。東(2007)では、ブルームで真珠貝ダイバーとして働いていた日本人への聞き取り調査を行い、「マライの人が 4 人位いた。マライ語は覚えやすい。船では、それを使ってマライの人と話した(東 2007:19)」と日本人がマレー語を習得しようとしていた様子が報告がされている。

表 1 PLP マレー語起源

	マレー語起源 PLP	起源語	英語訳 [function]	日本語訳 [用法]
1	angkaa, hangka	M	hoist the sail	帆を張る
2	apa appa	M	what?	何
3	bagu bagus bagush	M	good, nice	良い
4	banya	M	much	たくさん
5	banyaa	M	much, many	たくさん
6	beso	M	tomorrow	明日

調査報告

	マレー語起源 PLP	起源語	英語訳 〔function〕	日本語訳 〔用法〕
7	burum	M	from	～から
8	bussa:rr	M	large	大きい
9	chinda	M	lover, girlfriend	恋人、ガールフレンド
10	de~dea	M	he/she	彼、彼女(3人称単数)
11	deorang	M	he/she	彼、彼女(3人称単数)
12	inihari	M	today	今日
13	jau	M	far	遠く
14	kargja	M	work	仕事
15	kita-orang	M	we	私たち(1人称複数) ※聞き手を含まない
16	koi	M	you	あなた(2人称単数)
17	koi-orqng	M	you	あなたたち(2人称複数)
18	kotol	M	dirty	汚れた
19	kurua	M	go-out	出かける
20	lakkas	M	quick	速い
21	luke	M	cigarette, smoke	タバコ
22	mana	M	where? which?	どこ、どれ
23	makan	M	food, to eat	食べ物、食べる
24	masa	M	cook	調理する
25	nasi	M	cooked rice	ご飯
26	owang	M	money	お金
27	panchin	M	to fish	釣りをする
28	pasang	M	bet, raise the stake	賭ける
29	pokorr pokoro	M	what time?	何時
30	pukul berapa	M	what time?	何時
31	ratang	M	come	来る
32	samua-orang	M	we	私たち(1人称複数) ※聞き手を含む
33	saya	M	I	私(1人称単数)
34	shiki	M	a bit	少し
35	singapo:rra	M	Singapore	シンガポール
36	tau	M	know, be aware	知っている
37	tera	M	[all-purpose negator]	〔万能否定語〕
38	kicchi	KM	small	小さい

	マレー語起源 PLP	起源語	英語訳 [function]	日本語訳 [用法]
39	peke	KM	to go	行く
40	piki	KM/BI	to go	行く
41	stenga	KM/BI	a bit more	もう少し
42	tare	KM/BI	to pull	引く
43	terrarra	KM/BI	nothing at all	何もない
44	ujan	KM	rain	雨
45	bokang	M	[negative]	[否定の連語節で使用] (戦後)
46	suda	M	[preposition]	[述語の前置詞として使用] (1960年代)
	マレー語起源語 計	46 語		

4.3 アボリジナルピジン英語起源

Hosokawa(1987)によると、アジアからの移民が到着し、PLP が形成される以前から真珠貝採りに従事させられていたアボリジニの間ではアボリジナルピジン英語が確立していた。そして、一般的にはブルームに到着したにアジア人は英語がほとんど話せなかったため、アボリジニから英語を習うケースが多かった。ブルームで暮らす日本人を含むアジア人の話す英語は、ヤウル(Jauor)、バルディ(Bardi)、カラジ(Karajarri)のアボリジニの英語と非常によく似ている(Hosokawa1987:288)。つまり、アジア人が学んだ英語はアボリジナルピジン英語だったのである。その影響でアボリジナルピジン英語には36語と言うマレー語の次に多くの語彙がPLPに取り入れられたと考えられる。

表2 PLP アボリジナルピジン英語とその起源

	アボリジナルピジン英語起源 PLP	英語訳	日本語訳
1	angka	anchor	錨
2	apta	after	～の後
3	baiya	buyer	買い手
4	biya	beer	ビール
5	buku	book	本
6	bure	bread	パン
7	chakkoi	chuck away	捨てる
8	chin	chain	鎖
9	chiri	three	3
10	daiba	diver	潜水士

調査報告

	アボリジナルピジン英語起源 PLP	英語訳	日本語訳
11	dekko	let go	(錨を) 下ろす
12	ho	four	4
13	ho:sherr	fore-sail	前帆
14	i:jim	eat	食べる
15	Japang	Japan	日本語
16	japani	Japanese	日本人
17	kam	come	来る
18	kiccim	to catch	彼を捕まえる
19	kirin	clean	きれい
20	kopi	coffee	コーヒー
21	kriki, kiriki	small bay, inlet	小さい港、入り江
22	kurok	o'clock	～時
23	mairo	mile	マイル
24	mi	me	私
25	mo	more	もっと
26	no	no	否定形
27	no:rr	north	北
28	pillipi:no	Filipino	フィリピン人
29	po:rr	pearl	真珠
30	sau～saurr	south	南
31	to:k	talk	話す
32	wo	war	戦争
33	yu	you	あなた
	アボリジナルピジン英語 計	33 語	

4.4 日本語起源

PLP における日本語起源の語彙の特徴は機能形態素が見られること、標準日本語ではなく、西日本方言が見られることである。和歌山県や、広島県など西日本から多くの日本人が豪州へ渡ったことにより、西日本方言が多く PLP に入り込んだと考えられる。日本語起源の語彙はマレー語やアボリジナルピジン英語に比べると多くはない。しかし、ya や ka のような機能形態素である接辞が文の機能で重要な役割を果たしている。これら、機能形態素の機能については 5 節で詳しく述べる。

表3 PLP 日本語起源

	日本語起源 PLP	英語訳・用法	日本語訳・用法	語源：地方
1	ippe:	one-cup	一杯	いっぺー
2	ka (接辞)	question/conditional	疑問／条件	か
3	mo:cho	more	もう少し	もうちよっと もうちよい
4	nga	topic maker (particle)	主題、主語	が
5	o:kiniyo	thank you	ありがとう	おおきに： 西日本方言
6	rra	etc, and so on	～など、～とか	～ら：西日本方言
7	saki	grog, liquor	酒類	酒
8	sasmi～sasimi ～chachimi	raw fish	刺し身	刺し身
9	se (接辞)	imperative form (particle)	命令	せ：西日本方言
10	somo	wrestling	相撲	相撲
11	ya (接辞)	predicate form (particle)	断定	や：西日本方言
12	yo (接辞)	emphatic/vocative form (particle)	感動詞／述語の 念押し	よ
	日本語起源 計	12 語		

4.5 マレー語と日本語の混合形

マレー語と日本語は音韻的に類似しているものがある。表4のマレー語+日本語の()内を見ると、マレー語、日本語ともPLPの語彙によく似ているので、どちらかの音韻変化の可能性も考えられる。しかし、本稿では音韻的な検証は行っていないので、本文中に記載されているPLPに関して「日本語とマレー語の実用的な妥協点として語彙の混合が行われたケースがある(Hosokawa 1987:292)」を踏襲し、表4の3語はマレー語と日本語の混合形として分類する。このように混合した形は主にPLPのアボリジニユーザーが使用していた。マレー語と日本語が音韻的に類似していることで、アボリジニたちにはマレー語と日本語の区別がつきにくかった、そして、言語的な意識も希薄だったことが考えられる。このように、語彙レベルで混合形が見られるのがピジンの特徴の一つである。

表4 PLP マレー語+日本語

	マレー語+日本語 PLP	英語訳	日本語訳
1	ara(ada+ar-u)	to be there	ある
2	minom(minum+nom-u)	drink	飲む
3	nate(nante+mat-e)	wait	待て
	マレー語+日本語 計	3語	

4.6 語彙分析のまとめ

Hosokawa(1987)から収集した語彙(異なり数)の集計が表5である。今回のPLPの語彙の収集と分類によって、PLPの起点言語となるのが、マレー語、アボリジナルピジン英語、日本語であることが確認できた。一番多いのはマレー語で全体の48.9%である。続いて、アボリジナルピジン英語が35.1%、日本語が12.8%、マレー語+日本語が3.2%と言う結果である。McGregor(1988)によると、PLPの単語リストは管見の限りではないので、Hosokawa(1987)に記載されているPLPの語彙は、資料としても大変貴重だと言える。

表5 PLP 起源語別集計

	マレー語起源	アボリジナル ピジン英語起源	日本語起源	マレー語+ 日本語	総数
語彙数(%)	46語(48.9%)	33語(35.1%)	12語(12.8%)	3語(3.2%)	94語

5. 日本語の機能

PLPにおける日本語起源の語彙にはka, se, ya, yoの機能形態素(接辞)が見られる。Hosokawa(1987)でもこれらの形態素の機能について述べられているが、本稿でもya, yo, kaの機能についての確認を行う。例文の1行目はPLP、2行目は解説(逐次訳)、3行目は言語(マレー語=M、クバン・マレー語=KM、アボリジナルピジン英語=APE、日本語=J)、4行目は英語訳、5行目は日本語訳である。(日本語訳は筆者によるものである)

PLPの使用者は前述のように、マレー人、日本人、フィリピン人、中国人、アボリジニなどであるが、日本人の多くは和歌山県、広島県などの西日本出身者である。そして、PLPは日本人とアボリジニの間、中国人と日本人の間など、非マレー人の間のコミュニケーション媒体としても使われていた(Hosokawa1987:288)。

5.1 yaの機能

西日本方言であるyaは標準日本語では断定の助動詞「だ」である。例文1ではPLPのpo:rr kicchi:に対する日本語訳は「小さい真珠」又は「真珠が小さい」である。

Hosokawa(1987:291)は、例1の *po:rr kicchi:* は句とも節とも解釈できるが、例2では、日本語由来の助詞 *ya* を利用して、この曖昧さを解決する工夫がされていると述べている。マレー語では「小さい真珠」でも「真珠が小さい」でも、*Mutiara kecil* で表現できる。つまり、句と節の区別がない。そのため、マレー語話者にとって、*po:rr kicchi:* は、特に不自然ではなかったかもしれない。しかし、日本人にとっては、意味や語順などの点から考えても、句と節の区別がないことを不自然に感じた可能性がある。そのため、例文2のように日本語起源の *ya* を文末に加えることで「真珠が小さい」と言う意味に限定して、句と節の区別をしていたのではないだろうか。このように西日本方言の *ya* はマレー語と日本語の文法的な違いによる曖昧さの解消に利用されていたと考えられる。

例文 1

PLP	<i>po:rr kicchi: (.)</i>
解説	pearl small
言語	APE KM (kici)
英語	small pearl or The pearl is small.
日本語	小さい真珠 又は 真珠が小さい

例文 2

PLP	<i>po:rr kicchi: -ya.</i>
解説	pearl small 断定
言語	APE KM J
英語	The pearl is small.
日本語	真珠が小さい

5.2 *yo* の機能

例3、*Mi to:k japani* の *yo* が付かない場合は「私は日本語を話す」という単なる事実だけを述べている。Hosokawa(1987)には、*yo* は *emphatic/vocative particle*(強調/呼格)として用いられるという以外に、例4に関する詳しい解説はない。しかし、*Mi to:k japani yo* は、英語訳が *I can speak Japanese* となっていることから「私は英語が話せる」である。これは、念押しの機能がある *yo* を付け加えることによって「話す」ことが強調されて「話せる」という意味で使用されていたと考えられる。このように、例4の *yo* は *emphatic*(強調)の中でも、特に念押しとして使用されていたと考えられる。

例文 3

PLP	<i>Mi to:k japani</i>
解説	me talk Japanese
言語	APE APE APE
英語	I speak Japanese.
日本語	私は日本語を話す。

例文 4

PLP	<i>Mi to:k japani yo</i>
解説	me talk Japanese 念押し
言語	APE APE APE J
英語	I can speak Japanese !
日本語	私は日本語が話せる。

5.3 *ka* の機能

日本語では「か」を文末に加えることで疑問形を作ることができる。例文5の *ka* は日本語と同じ疑問詞の機能である。疑問詞の形は、マレー語が *-kah*、日本語が *-ka* のように非常に似ている。このような形と機能の偶然的類似がアボリジニの自由な仕様と

機能の拡張を促した可能性があることは Hosokawa(1987:291)においても触れられている。しかし、例文6では「もし、雨がひどくなったら、仕事をやめて錨を下ろす」のように条件文の標識として ka が利用されている。Hosokawa(1987:291)は、このような条件としての使用はマレー語でも日本語でも見られないこと、また、条件の際には、高いフラットピッチで発音され、単に疑問文を表す場合は、通常、低いか中高のピッチで発音されると、その使用を発音で区別していたことも述べている。

例文 5

PLP	Yu kam burrum japang -ka: sau.
解説	you come from Japan south
言語	APE APE APE APE J APE
英語	Did you come from Japan or from the south (i.e. Perth)?
日本語	あなたは日本から来たのか、それとも南から来たのか。

例文 6

PLP	ujan banya: ratang -ka: tera karaja dekkko angka.
解説	rain much come not work drop anchor
言語	KM M M J M APE APE APE
英語	If the rain gets heavier, we shall stop working and drop the anchor.
日本語	もし、雨がひどくなったら、仕事をやめて錨を下ろす。

Hosokawa(1987)には PLP について 13 例文の記述があるが、そのうち 10 例文(77%)で日本語起源の語彙が使用されている。そして、その 10 例文のうち 8 例文で、文の機能に関わる ya, yo, ka の使用が見られる。このように PLP では、日本語起源の語彙数は少ないが、日本語の機能形態素の影響が非常に大きい。もし、日本語がなければミスコミュニケーションが生じる可能性もある。PLP と同じように起点言語に日本語がある横浜ピジンでは日本語の助詞の使用はほとんど見られないし、英語や中国語などの基層言語から機能形態素が持ち込まれてもいない。このように基層言語から機能形態素が持ち込まれ、それが文の機能に大きく関わっていることは、PLP の大きな特徴の一つであると言えるであろう。

6. Broome Pearling Lugger Pidgin の特徴

本節ではまず、ピジンの概念について確認を行う。そして、PLP と比較するために横浜ピジンの概要にも触れながら、PLP の特徴について考察を行う。

6.1 ピジンの概念

ピジン(pidgin)は複数の言語の話者がお互いの言語が理解できない状態で集まる時に自然発生的に生じる単純化された言語体系である。ピジンを形成する起点言語

は、言語接触論の主流の考え方に沿って、狭義のピジンが形成されるには、最低 3 つ以上の言語が接触していなければならないという立場を取る(ロング 2010)。従って、ピジンにおける起点言語は3 つ以上ということになる。そして、ピジンでは通常、語彙の大部分は1 つの言語に由来する(セバ 2013:51)とされている。次に、ピジンの使用者は起点言語が3 つ以上なので、3 言語以上の母語話者たちである。ピジンの使用者にはそれぞれ母語があるので、ピジンの母語話者は存在しない。また、ピジンは限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺の(marginal)言語である(Todd 1974 田中(訳) 1986:5)ため、限定された環境での使用と言うことになる。

6.2 Broome Pearling Lugger Pidgin の概要

(1) 起点言語の数

PLP の起点言語は、語彙の収集の結果から KM を含むマレー語、アボリジナルピジン英語、そして日本語の3 つである。PLP では英語母語話者であるヨーロッパ人の関与がないとされているので、英語起源の語彙はアボリジナルピジン英語として数えた。一方、横浜ピジンでは日本語、英語、マレー語、中国語など3 つ以上の言語が起点言語として挙げられる。

(2) 起点言語の割合

PLP では語彙の割合は表 5 の通り、マレー語起源が 48.9%、アボリジナルピジン英語が 35.1%、日本語が 12.8%、マレー語と日本語の混合語が 3.2%である。一方、横浜ピジンでは Daniels(1948)、ロング・甲賀(2017)、西沢(2020)などにより、日本語が 85% 以上であることが確認されている。

(3) 使用者

PLP はブルームで真珠貝採取に関わった日本人、マレー人、フィリピン人、中国人、アボリジニなどの間で使用された(Hosokawa 1987:289)。一方、横浜ピジンの使用者は日本語母語話者、英語母語話者、中国語母語話者などである(西沢 2020)。

(4) 使用環境

ピジンの使用環境はある限られた範囲とされる。PLP の使用は主に採貝船内の労働環境に限られていたが、ブルームの町のパブや街角でも様々な言語的背景を持つアジア人やアボリジニとの交流もあった。一方、横浜ピジンでは横浜開港と同時に横浜居留地が作られ、わずか1 平方キロメートルと言う限られた環境で日本人と外国人の間で、主にビジネスのためのコミュニケーションが行われた(西沢 2020:127)。つまり、PLP、横浜ピジン共に使用環境は限られた範囲だった。

(1) から(4)までをまとめたのが、表 6 である。

表6 PLP と横浜ピジンの概要

		PLP	横浜ピジン
(1)	起点言語の種類	マレー語、アボリジナルピジン英語 日本語	日本語、英語、マ レー語、中国語他
(2)	起点言語の割合	マレー語 48.9% アボリジナルピジン英語 35.1% 日本語 12.8%、混合語 3.2%	日本語 85%以上 英語他
(3)	使用者	マレー人、日本人、フィリピン人、 中国人、アボリジニなど	日本人、欧米人、 中国人など
(4)	使用環境	西豪州ブルーム、真珠採取船	横浜居留地

6.3 ピジンの特徴からの比較

表6のPLPと横浜ピジンの概要を踏まえて、6.1ピジンの概念とセバ(2007)を参考にして、(1)から(6)にあげたピジンの特徴に、PLPと横浜ピジンの特徴が当てはまるかを検証した。それをまとめたのが、表7である。

(1) 複数言語間の接触

複数言語間の接触は表6の起点言語の種類からもわかるようにPLP、横浜ピジンともに複数の言語が接触している。

(2) 起点言語が3つ以上

起点言語がPLP、横浜ピジンともに3つ以上であることは表6から確認できる。

(3) 母語話者がいない

PLP、横浜ピジンの使用者たちはそれぞれの母語を持っているので、PLP、横浜ピジンを母語とする人はいない。

(4) 第三者間（基層言語話者同士）の使用

第三者間の使用とは、一番多くの語彙が取り入れられた言語以外の言語話者間での使用のことである。PLPではすべての起点言語の母語話者同士で使用されていた。横浜ピジンの場合、日本語母語話者以外の英語母語話者や中国語話者の間でも横浜ピジンが使用されていた。従って、PLP、横浜ピジンともに第三者間の使用はあった。

(5) 一つの言語からほとんどの語彙を取り込む

PLPは今回の調査ではマレー語が48.9%で一番多かった。Hosokawa(1987)ではマレー語起源に関して、その一部を記載すると断りを述べているので、実際にはもっと多くのマレー語起源の語彙がPLPには入っていたと考えて良いであろう。しかし、

Hosokawa(1987)以外に、PLP の語彙リストが管見の限り見当たらないことも踏まえ、本稿で作成した語彙リストからは、一つの言語からほとんどの語彙を取り込んでいるとは言えないと判断した。一方、横浜ピジンは日本語起源の語彙が85%以上なので一つの言語からほとんどの語彙を取り込んでいると言える。

(6) 基層言語から機能形態素が取り込まれるのはほぼ皆無

第5章で述べたように、PLP では日本語の機能形態素が取り込まれ、文の機能に大きく関わっている。これはピジンの特徴とは異なる。一方、横浜ピジンには基層言語である英語や中国語の機能形態素は取り込まれていない。

表7 ピジンの特徴からのPLPと横浜ピジンの比較

	ピジンの特徴	PLP	横浜ピジン
(1)	複数言語間の接触	○	○
(2)	起点言語の数が3つ以上	○	○
(3)	母語話者がいない	○	○
(4)	第三者間(基層言語話者同士)の使用	○	○
(5)	一つの言語からほとんどの語彙を取り込む	×	○
(6)	基層言語から機能形態素が取り込まれるのはほぼ皆無	×	○

このように、横浜ピジンが(1)から(6)までのピジンの特徴をすべて有しているのに対し、PLP は(5)一つの言語からほとんどの語彙を取り込む、(6)基層言語(PLP の場合は日本語)の機能形態素が取り込まれるのはほぼ皆無、という2点がピジンの特徴及び横浜ピジンと異なる。そして日本語の機能形態素が、文の機能にも大きく影響を与えている。つまり、一つの言語からほとんどの語彙を取り込んでいるとは言えないこと、基層言語(PLP の場合は日本語)の機能形態素が取り込まれていることが、PLP の特徴であると言えるのではないだろうか。

7. まとめ

これまでの分析結果から、設定したリサーチクエスチョン(1)、(2)の回答は以下のようになる。

- (1) PLP と横浜ピジンは起点言語に日本語があるピジンであるが、PLP では一つの言語からほとんどの語彙を取り込む、基層言語由来の機能形態素はほぼ皆無の2点で横浜ピジンとは異なることがわかった。これらは、PLP の大きな特徴と言えるであろう。
- (2) ピジンでは基層言語から機能形態素が取り込まれることは皆無に近い。しかし、PLP では日本語の機能形態素(接辞)が取り込まれ、文の機能にも大きく関わっていることから、PLP における日本語の影響は大いにあると言える。

本稿では、ブルームにおけるフィールドワークによって、Hosokawa(1987)に記載された語彙を収集し、起源語ごとに分類した語彙リストを作成することができた。また、PLP では日本語の語彙が少ないにも関わらず、機能形態素(接辞)が重要な機能を果たしていることも確認できた。これらは今後の PLP の研究にとって重要な資料になるであろう。今後は語彙面だけでなく、文法面からも PLP の研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

- Daniels, F J (1948) The Vocabulary of the Japanese Ports Lingo. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies Volume XII: Parts 3 and 4 The School of Oriental and African Studies*
- Hosokawa, Komei (1987) Malay talk on boat: an account of Broome Pearling Lugger Pidgin, Donald C. Laycock and Werner Winter (eds.), *A world of language papers presented to Professor S.A. Wurm on his 65th birthday*. PL. C-100. pp.287-296
- McGregor, William (1988) *Handbook of Kimberley languages. Vol. I: General information*. C-105, xiv+276 pages. Pacific Linguistics, The Australian National University
- Sebba, Mark (1997) *Contact Languages: Pidgins and Creoles* Palgrave Macmillan
(セバ・マーク 田中孝頭(訳)(2013) 『接触言語 ピジン語とクレオール語』 きこ書房 2013)
- Sissons, David(1979) The Japanese in the Australian pearling industry, *Queensland Heritage Vol. 3, Issue 10* pp.9-27
- Todd, Loreto (1974) *Pidgins and creoles*. London and New York: Routledge and Kegan Paul Ltd.
(トッド, ロレット 田中幸子 (訳) (1986) 『ピジン・クレオール入門』 大修館書店)
- 串本町史編さん委員会(1995) 『串本町史 通史編』
- 太地町史監修委員会(1979) 『太地町史』 太地町役場
- 西沢雅代(2020) 「19 世紀開港場ピジンの語彙論的分類と分析—起源言語と語彙形成に注目して—」 『日本語研究』 第 40 号 pp.127-141
- 東悦子(2007) 「移民史に残る紀州の真珠貝ダイバー」 『紀州経済史文化史研究所紀要』 第 28 号 A13 - A28
- ロング・ダニエル、甲賀真広 (2017) 「接触言語の分類に関する量的研究—起点言語の割合を通して—」 『人文学報』 第 513-7 号 pp.45-54

(にしざわ まさよ・東京都立大学大学院博士後期課程)